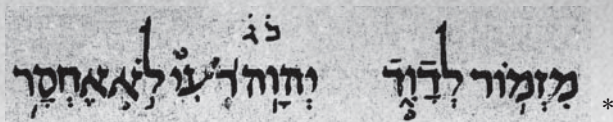


ヘブル語聖書写本について

小田 賢二



: לא אֶחְסָר רְעִי יְהוָה לְדָוִד מִזְמוֹר
 ルーサふエ ーろ ーイロ イナドア ドイヴダレ ルーモズミ
 いなし乏欠は私 者牧がわ は主 のデビダ 歌 ©ミルトス

ダビデの歌、主は羊飼い、わたしは何も欠けることがない。

これは、国立音楽大学図書館の蔵書になった *The Leningrad Codex* 「レニングラード写本、MSB19a」750ページ左第2フレーズ1行目の詩編23編1節を音読したテキストですが、これに関連した聖書に纏わるお話をします。

聖書といえは、ラテン語で *Biblorum Sacorum*: 「聖なる諸書」から英訳されたバイブル Bible という語が、わたしたちにも馴染みがあり、キリスト教の經典として周知です。旧約聖書と呼ばれる「律法の書」、「預言書」、「諸書」などは、もともと、ヘブル語と一部アラム語で書かれていました。紀元30年頃、イエス・キリストの出来事が起こると、ユダヤ人社会から袂を分かつた彼の弟子たちや仲間、いわゆるクリステイアンは、イエス・キリストの救いの出来事の証言に重きを置くようになって、創造主と人類との新しい契約を唱え始めました。それを記憶し書きとめたものが新約の書です。ギリシャ語で書き記されたものだけが伝えられています。そのため、それ以前の聖書伝統は古い契約として受けとめられて旧約の書と呼ばれ、しかもクリステイアンにはヘブル語テキストよりも七十人訳ギリシャ語テキストに関心が移りました。そしてラテン語の翻訳テキストを経由して、近代以降の各翻訳聖書時代に移行していきました。

レニングラード写本の原本は古い契約を守り続けた人たち(ユダヤ教徒)の聖書の伝統の遺産で、ヘブル語原文のことを「anach」タナハ (Tanach) トーラー「律法」、na = ナゴーム「預言書」、ch = クトビーム「諸書」の意味)と言います。そしてユダヤ教の人

たちはこの部分だけを、いわゆる「聖なる經典」タナハと呼んで人生の精神的よりどころとし、今も大切にしています。このヘブル語聖書: タナハは本来、母音を付さずに書かれました。ヘブル語は典型的な子音言語なのです。すなわちヘブル語の表記は子音のみで書かれ、母音は各子音に付加されるだけで表記の記号を持たない言語でした。ところがアラム語がヘブル語に代わって主要言語になるにつれ、トーラーの知識低下が起こり、ヘブル語が廃れ、ついには失われる危機に見舞われました。そこで、一連の母音符号が導入されました。母音、すなわち、点による表示法が追加され、後には抑揚記号や段落への分割が加わっていきました。この仕事はマソラー学者(ヘブル語の動詞 *masar* は「手渡す、伝える、伝達する」の意)によって行われ、バビロニアとパレスティナで研究されました。さらにパレスティナのテイベリアスでは、ベン・アシエル系とベン・ナフタリ系両派の熾烈なマソラー抗争の末、ベン・アシエルのテキストが標準として認められたのです。

このレニングラード公立図書館(現ペテルスブルグ国立博物館)の所蔵するレニングラード写本の原本は、1008年ないし1009年にベン・アシエルによって完成しました。マソラー記号がどこに記されているので、ヘブル語の初級知識があれば、比較的らくに、原文テキストを音読していくことが可能だと思えます。この記号は朗誦するための文節分離区分にもなるので、私たち音楽に関わるものたちにとっても興味深く、楽譜的な機能が垣間見られて面白いです。

●おたけんじ 本学非常勤講師(音楽学)

*The Leningrad Codex; a facsimile edition Eerdmans p.750 (請求記号●J115-680)

**『ヘブライ語聖書対訳シリーズ32 詩編1』ミルトス p.96 (図書:発注中・CD:XD64406~7)